

総合人文科学研究センター研究部門
現代社会における「想像力」の総合的研究

2018年度第3回研究会の報告

日時：2018年10月12日（金）18時30分から20時10分

会場：戸山キャンパス33号館16階、第10会議室

このたびの「想像力」研究2018年度第3回研究会は公開で開催し、部門構成員を含む10数名の参加者を得た。今回は、竹中均先生（本学教授）が「ファンタジーと自閉症」という題目の下、話題提供を行った。自閉症者の特性とファンタジーの性質との共通性を指摘した発表内容は、現代社会の精神的状況を明らかにするものでもあり、たいへん刺激的な研究会となった。以下に、竹中先生のご執筆による当日のまとめを掲げる。

発達障害の一つである自閉症は、「社会性の障害」を伴うとされるだけでなく、「想像力の障害」があると言われることがある。しかしながら、それは単に、想像力が欠如しているということではないと思われる。むしろ、「定型発達者」とは想像力の質が異なっていると理解した方がよいのではないだろうか。

自閉症者は「自己ファンタジー」を持つことがあると言う時、それは否定的な意味で言われている。だが現在、作品としてのファンタジーは多くの人々を魅了している。そのようなファンタジーの性質には、自閉症者の世界といくつかの共通性や共鳴できる部分があるように思われる。

例えば、書かれたものを字義通り理解すること、一旦作り上げたルールを厳密に守ること、見かけ（視覚的情報）が重要な意味を担うこと、予測可能性の高さなどである。

ファンタジーからは、パソコン文化の発展と共に、ロールプレイングゲームが誕生したが、その種のゲームを自閉症者が好むという意見もある。ゲームを好むことは一般的にはあまり良く評価されにくいのだが、ファンタジーと自閉症の関わりについて再考することによって、そこから新しい可能性を見出すことが出来るのかも知れない。

（竹中先生記）

今回の研究会は、12月末までのあいだで、可能な限り多くの参加者を得られる時間を探し、開催する予定である。（報告取りまとめ：御子柴）